

Title	マレット氏著 英国財政二十五年史
Sub Title	
Author	堀江, 帰一
Publisher	三田学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.5 (1914. 6) ,p.617(111)- 619(113)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19140601-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

公衆に對し損害を醸さざるを要すといへり、此種の議論は單に英國學者に依りて唱導せらるゝに止まらず「ワグナー」「ロツシヤ」「セツフレ」等獨逸學者中にも之を主張するもの尠からず。要之獨逸の銀行制度が投機的傾向を帶ぶることは肯定すべからざる事實にて平素其運用宜しきを得るに當りては其收益も亦大なりと雖一朝不況に沈淪するや莫大の損失を醸す虞れあり長期間の平均に於ては寧ろ英國銀行の堅實なる方針に如かざるべしと雖も經濟發達の點に於て尙一籌を輸する獨逸にありては多少の犠牲も亦工業の發達を企圖する上に於て止むを得ざる所ならん。

されば「シユモラー」教授の如きも之を是認し今日經濟社會に於て各種會社の設立組織の變更或は有價證券の發行引受の任を當る者を必要とす

るや論を俟たざる所にて英國預金銀行が斯る方面に染手せざる所以のものも別に私人銀行の存在するありて分業的に之を擔任するが爲めに他ならず、普通銀行が金融事務を掌握するが爲に一朝失敗の曉に於て經濟界を攪亂する虞ありとの議論の如き私人銀行の營業も其内面に於て預金銀行の援助に俟つこと大なるを知らざるが爲めにして私人銀行の失敗は觸て預金銀行に其累を及ぼし來るは當然のこと、いふ可く只其直接と間接との差あるに過ぎざるなり、寧ろ獨逸諸銀行が巨大なる資本を擁して之に充て加之投資企業に對して自ら管理經營の任に當るの安全なるに如かざるなりといへり。(未完)

批評と紹介

英國財政二十五年史

Bernard-Mallet-British Budgets, 1837-38 to 1912-13. 英國自由黨内閣に於て、曩きに郵便事務長官たり、後に商務院長官に移れるシドニー、チャールズ、バックストン氏は千八百八十八年「財政と政治」(Finance and Politics. An Historical Study)と題する一書を著し、前後二卷に於て、十八世紀末より千八百八十七年に至る約九十年間英國に行はれたる財政策並に之を支配したる政治上の變動を敘述し、殊に財政と政治との交渉する跡を明にしたり。此書は廣く世に傳はらざりしが如しと雖も敘事の周到にして、引抄の該博なるの點に於て、今日に至るまで英國財政史の研究者を益するもの尠なりとせず。バックストン氏自ら稿を次ひて、千八百八十八年以後の

財政事歴を評論するか、又は他に氏の業を繼ぐ可き者出で、「財政と政治」に於て中斷せられたる英國財政史の脈絡を繋がんことは、吾輩の喝望する所なりしが、バックストン氏は其後政治上の運動に忙はしくして、再び著作界の人たらず、又同種の業を企つる者を見ざりき。今マレット氏の著書に依て、多年の缺陷を補ふを得たるは、英國財政の研究者に取つて、喜ぶ可き所なりとす。

固よりマレット氏の著書は體裁に於て、敘述の方法に於て、バックストン氏の著書と異なる所多く、殊に財政と政治との交渉に重きを置かず、純財政の方面に研究の範圍を限れり。氏は本書を區分して、三編とし、第一編は豫算演說並に討議と題し、千八百八十七年より千八百九十二年に至るゴツシエン氏編成の六豫算、千八百九十三年より千八百九十五年に至るハーコート氏編成の三豫算、千八百九十六年より千九百二年に

至るヒックス、ビーチ氏編成の七豫算、千九百三年のリッチー氏編成の豫算、千九百四年より千九百五年に至るチエンバーレン氏編成の二豫算、千九百六年より千九百八年に至るアスキス氏編成の三豫算、千九百九年より千九百十二年に至るロイド、デヨーチ氏編成の四豫算に就て、其綱要を掲ぐると同時に豫算案討議當時、議院の外に起れる評論を摘記したり。第二編は二十五年間に於ける歳計の統計表にして、第三編は豫算案を解釋し、又之に關する評論を判斷するに必要な數字を以て之に充て、是等の數字は一面に於て、最近二十五五年間に於ける英國財政並に經濟の發達を説明するに足るの觀あり。

マレット氏の如何なる人なるやは、評者の寡聞なる之を知らずと雖も、本書に於ける評論の公平にして、且つ所屬黨派の如何に拘はらず、時の當局者に對して、大なる同情を表せるは、本書の價値を大ならしむるの特色として、之を擧

げざる可からず。千八百八十八年の公債借換計畫に對して、「此計畫には近時コンソール公債の市債著しく低落せるが爲めに、種々の批評を聞く」と雖も、十九世紀の末年に於けるが如く、此公債の市價に異數の騰貴を見たる以上は、何人が大藏大臣たるも、借換の提案を拒絶する能はざる可く、而して借換を行ふものとすれば、ゴツシエン氏の擇びたる時に於て、之を爲すを適當としたり」と云へるが如き、又ロイド、デヨーチ氏の財政計畫が概して成效の緒に就ける事情を明にし、殊に最後の斷案として、「經濟上の見地より觀察するときは、社會改良の計畫に要する經費に對する當否の斷定は國民の生産的能力並に勞働の効程を増進するを得る事實の有無に依らざる可からず。此目的にして到達せられんか社會の消費力、各種貨物に對する需要、其需要に應ずる權能は共に増進し、納税力は一方に増加する負擔と共に、伸張するに至る可し。固より

負擔に堪へ得る租税を以て、限度す可きは論を俟たずと雖も、以上の事情の存する以上は、新政策の成敗は單に一時の結果に依て、之れを定むる能はず、極端なる悲觀論も、樂觀論も今日之れを言ふは尙早の嫌なき能はず」と論じたるが如き、共にマレット氏が一箇の財政記述者に非ず、又財政統計の編纂者に非ず、財政上の事件を論斷するに確乎たる見識を備ふるの人なることを明にするものと云ふ可し。

之を要するに最近二十五五年間の英國財政事歴は波瀾あり、曲折あり、而して研究の資料に富むこと、他國の五十年又は百年間に於ける財政史に勝るものあり。今、本書の如き、財政史として公平なる著書を得たるは、研究者に一道の光明を與へたるものとす可し。(堀江歸一)

ウィッテ伯著『國民經濟並財政講義』
Graf Witte, Vorlesungen über Volks und
Staatwirtschaft.
「グループ」「シーメンス」「カーネギー」「ロックフェラー」等の如き企業界に於ける大立物の實傳を繙きし人は、誰人も經濟上に於ける活動が如何に吾人の精神的要素に起因することを認むるを得ん、斯くの如きは單に企業上に止まらずして同時に國家經濟にありても之れを指導する人物が眞に鞏固なる意志の人たると共に伶俐達見の人物たることによりて、著しく發展の狀態を異にするに至る可し、此見地より觀察して、吾人に最も興味を與ふるものは、伯「ウィッテ」の本著となす。

今を去る約十年前に「ウィッテ」伯は國民經濟及財政に就きて「ミハエル、アレサンドロヴィチ」大公に自己の懷抱せし處を述べしことあり、本書は實に此講義を増補訂正して世に公にせしもの